宗教感話

きこえの学校 ライシャワー学園

きこえの学校ライシャワー学園教諭
飛田 貴基
TOBITA Takaki

「エッファタ」と言われた。これは、「開け」という意味である。（マルコによる福音書　第七章三十四節）

日本で唯一のきこえの学校

東京都町田市の自然豊かな丘の上、小鳥のさえずりが響く並木道を歩いていくと、子どもたちの元気な歌声が聴こえてきます。「きこえの学校ライシャワー学園」――日本で唯一、聴覚障がいの子どもたちが手話を使わずに「聴き」「話す」ことを大切にしている学校です。通っているのは〇歳から中学三年生まで。私は中学部で国語科教員として生徒たちと関わりながら、この学校のことを、イエス様による「エッファタの奇跡」のような学校だと感じています。今回貴重な執筆の機会をいただきました。どんな学校だろうと、少しでも興味を持っていただければ幸いです。

一〇〇年続く、耳が開かれる教育

一九二〇年、アメリカの宣教師カール・ライシャワーが、長女フェリシアの難聴をきっかけにこの学校を創りました。土台にはキリスト教精神があり、二〇二五年四月に創立時からの校名である「日本聾話学校」から現在の校名に変わりましたが、礼拝や祈りの時間も含め、大事にしていることは変わりません。

最重度の聴覚障がいの子が多く、状況もそれぞれですが、「聴覚主導の人間教育」という理念を柱とし、補聴器や人工内耳といった補聴機器を装用して残された聴力を最大限に活かす道を模索、追求し続けています。私たちはその与えられた聴力の可能性を信じて子どもと関わっています。

きこえに関して安心できる環境を整える際、核となるのが、きこえの専門部署「オーディオロジー部」の存在です。この部署により、補聴機器の調整や聴力測定が行われ、適切な音が届けられます。また、登校後は毎朝、補聴機器や耳の状態をチェックし、少しでもきこえに違和感があればすぐに確認ができるようになっています。このように最適に調整された補聴機器に加え、教室での活動では赤外線補聴システムを使用します。これは、聴覚障害児にこそ一番良い音を届ける必要がある、という考えのもと各教室に設置されており、マイクを通して教師や友だち同士の声が雑音無く直接各々の補聴機器に届くようになっています。二〇二六年度途中からは、校内に耳鼻科の診療所も併設される予定で、より「聴く」力を見守り、支えていける学校を目指しています。

ことばを獲得するということ

「聴くこと話すことにこだわっている」というと、特別な訓練や厳しい練習をしている、とイメージする方もいます。しかしそういうことではありません。音が届く環境を整え、幼少期から音に親しみ、例えばチャイムが鳴れば「ピンポーンってきこえたね。あれ？　だれかきたのかな？」などと声をかけます。子どもは関わりの中で必要な音を感じ取り、音やことばには意味があるのだと理解し、もっと聴きたいと思うようになります。誰しも、心が動いた瞬間にある音やことばは、その心に刻まれていくものです。その瞬間を感じ取り、受け止め、「あなたの言いたいことはこういうことだったんだね」と聴かせ、やりとりをする。そうする中で、いつしか子どもの耳は開かれていき、お話しするようになります。ライシャワー学園では、そんな時間と関わりをたくさん積み重ねていきます。

その中心となるのが「個別話し合いの時間」です。幼少期から毎日十分間、教師と子どもが一対一で対話の時間を持ちます。小さい時には絵日記や絵本などを通したやりとり、そして年齢や発達に合わせてより複雑な内容でやりとりをするようになります。

以前、中学生が生徒視点で学校説明の文章を書いた際、「この学校は、聴くこと話すことを大切にしながら、話すということの本当の意味を教えてくれます。未来に希望を見つけられる学校です」と書きました。まさに子どもたちとの対話で大事にしているのは、「ただ音を聞く、ただ声を出す」のではなく、相手のいるコミュニケーションそのものです。相手を受け止め、じっと待つこともあります。タイパという言葉が言われる昨今ですが、私たちが大事にしていることは、効率ではなく、たとえ時間がかかっても、経験を通して各個人が見いだす借り物ではない自分なりの生きたことばで伝えることです。日々のやりとりから生徒が未来に希望を持てるようになったのなら、本当に嬉しいことです。

礼拝と祈り

礼拝では、讃美歌も歌います。礼拝後の休み時間に廊下で友だちと手を繋ぎながら笑顔で讃美歌を歌う小学生の姿を見たときには顔がほころびます。中学生になると、生徒全員で祈りを捧げる礼拝を行うこともあり、日々の感謝だけでなく、事件や戦争、災害などに対して「神さまなぜですか」「神さま私たちに何ができますか」と思いを祈りに込める生徒もいます。子どもたちは祈りによって、神さまとも自由に会話していると感じます。

またある年、卒業間近の中学三年生に、「この学校で学んだ一番大切だと思うことは何ですか」と問いかけました。一人の生徒はじっと考え、両親も目の前にいる中、噛み締めるように頷き、「自分は必要だから生まれてきたんだと」ということです。前に礼拝でそのことを聴き、それからずっと心に残っています」と答えました。またある生徒は、「礼拝で愛を知った僕は、これからも色々な人を愛し、生きたいと思いました。そして自分の愛した人がまた別の人を愛し、その繰り返しがこれからの世界に続けばいいなと思いました」と答えました。思いがけないことばのプレゼントに、ご両親と涙を流したことを覚えています。

祈り、祈られる学校として

子どもが少ない時代です。また、補聴機器や医療の進歩もあり、きこえの発達スピードも以前より飛躍的に速くなりました。地域の学校に転校する子も増え、生徒数は大きく減っています。医療が更に進歩したら、いつか、ライシャワー学園もその役目を終えるときが来るのかも知れません。しかし、先ほどの生徒の心からのことばを聴けば、「それはまだ今ではない。この教育を必要としている子どもたちや親がいる限り、無くしてはいけない」と思わされます。

校名変更も、診療所の開設も、苦しい中でこの教育を前に進めるための第一歩です。一〇〇年間、学校の経営が安定したことは一度もありませんが、いつも、苦しい中、たくさんの方が祈り支えてくださり続いている学校です。青山学院の皆様にもいつも大きなお支えをいただき、職員一同、感謝しております。

どうかこれからも、互いに祈り合う両校としていられたらと願っています。

（本校ホームページから生徒の歌や、個別話し合いの様子などを動画でご覧いただけます。そちらもぜひご覧下さい）